

## 創作 萬九郎從軍

## 安部 一郎

天正十九年夏のことであった。加藤清正は熊本城を出て、市外の高瀬村のあたりまで駕に乗って鷹狩に出た。高瀬村に入り暫くすると、路上に、酒を食い泥酔して寝ている男がいるので、清正の警固の家来が驚いて、

「下に居ろ、無礼であるぞ、殿様のお通りじや、疾つと立ち去れ」

と叱り飛ばしたが、この酔っ払いの百姓に筋骨逞しく背丈も人並優れていて、どころともしない。名を万九郎と呼ばれる無頼のものであったが、うつすらと臉をあけて、起きようとせず、

「お殿様が公事でお通りなら起きて道をあけてもよろしか、じやけど鷹狩なすつとなら、わしが好きな酒に酔って大の字にねていると同じこつ、おんなじ楽しみごとなら、民が酔って楽しんでるのをなし妨ぐるか、起きることはなかなかい」

ますます意地張って挺子でも動かぬという恰好を見せるので、家来

の一人が走って行って駕の中の清正にこの旨を告げると、清正も大いに怒って、縛って城の牢に押し籠めると命じた。

その翌日、万九郎を庭に引き出して清正が直々取り調べた。

「昨日は無礼を働いた咎で手討に致す、首を伸して待つて居れ」

と大声で呶鳴ったが、万九郎は首を上げて清正の顔を眺め、にやりと笑って

「殿様はふうげたこつをいわるる、馬鹿のごとある。来年にや高麗征伐があるということじやが、殿様は真先馳けて高麗に押し渡るとじやなかですか、そんならどうせ今殺すも、わしを高麗に連れて行って敵の城攻めに堀の埋め石がわりにでもして殺した方がよかごとある、今殺しても無駄というものじや」

清正は思わず万九郎の言古に氣勢をそがれてしまつて、成る程と思ひ、そのまま許して村に帰した。

高麗征伐のことは、前々から豊臣秀吉の心中を、浅野弾正から内証で聞いていたので、清正は一番乗りで朝鮮に押し渡ろうと、肥後五十万石の半分に当る熊本二十五万石を秀吉からねだつて拜領していたのであるから、或は領民も近いうちに出陣することを知っていたのかもわからない。万九郎は手討にならず釈放されるとき、命が助つたこともさりながら、今云つたことばに更に重ねて、高麗出陣の際は是非家来のはしくれでいいから連れていってくれと、庭土に頭を擦りつけ

て清正に願うのであつたが、清正は返事をせず、ふいと座を立てて奥に入ってしまった。

思うに、高瀬村の万九郎は大酒飲みの怠惰な人間であり、まともな生活ができなかつた男に違いない。しかし、人の意表をつくような奇矯な言動があるところが、今日でいえば生来の頭脳は悪くないニヒルな性格でもあつたらうか。

秀吉の朝鮮出征は第一軍として、小西行長、宗義智等を大将とする一万八千七百の将卒だつたという。これが天正二十年四月十日に釜山に到着している。小西行長も清正と同時に肥後二十四万石を秀吉から賜っているので、この高瀬村の万九郎は清正が朝鮮に連れていつてくれそうもないので、小西軍の軽卒の中にまぎれこんだのであろうか、何時の間にか釜山に来ていた。別に士卒として刀を振つたり、銃を射つたりして戦うわけではなく、荷駄を仕事として働かれたのである。万九郎としては、ただ故里で食い酔い泥中で頓死してもよし、異国の空に流浪して餓死してもよし、流弾に当って人知れず死んでもよいので、その虚無感から一応は物珍らしい他国の風光習俗の中で、相変らず濁酒に酔い、惨ましい雄叫びの戦塵の中で、眼だけは見開きいろいろ心の中に曇み込むのであつた。

釜山の緒戦はあつけなく一日で終つたのであるが、これは戦力の差もあつたようである。城將は鄭撥といふものであつたが、小西軍総勢

八百艘の舟が対馬から押し渡るときは、釜山港の入口に積たわる絶影島に狽に出ていた。今次大戦の真珠湾攻撃の日のように油断していたに違いない。日本の舟船の来るのを見て急ぎ城に帰つて戦死している。日本には鉄砲があつたのに、この頃の朝鮮にはなかつたのである。その頃の外務大臣で後に宰相になつた柳成龍という人の著した懲瑟録には

(天正十七年) (宗) (柳川)  
己丑五月。日本使対馬島主平義智及平調信僧玄蘇米聘。求信使通好。

(中略) 義智獻孔雀一雙烏銃槍刀等物。命放孔雀南陽海島。下烏銃於軍器署。我國有烏銃始此。

これをもつて見ると、「我國の烏銃あるは此れより始まる」ので、それまでは鉄砲が存在しなかつたことがわかる。また面白いのは、銃と一緒の孔雀のことであるが、これは燃藜室記述卷之十五、宣祖朝故事本末(芝峯類説)に

時倭使獻孔雀。都中士女出而縱觀。自京城至漢江。填咽雜沓閭里殆空。

と書かれているので、孔雀見物のため町が空になるほどの人出で混雑したのであるから、孔雀も恐らく余り渡来していなかつたのである。

平義智は宗義智のことで対馬の宗氏、平調信は義智の家来で柳川調

信のことである。佐賀の柳川と書かれているが、多分北原白秋の出身地である今日の福岡県の柳川の生れであろう。その父が柳川の出であるとか、余り出身が定かではないが、智謀の豪傑であつたらしい。流浪の果対馬に渡り宗氏の家来となり、累進して上席にあつた。宗氏を秀吉に会わせたりして仲介の勞を執るくらい的人物であつた。「豊公十萬の兵、勇將謀士雲の如き中で調信善く其の間に屹立して事を成して憚らないのは軍国の器局あるものというべし」などと後世の人から評されている。従軍僧でもあり、この朝鮮出征の前に渡海して朝鮮から信使を出せと要請しに行つた三人のうちの一人の僧玄蘇というのは、京都東福寺に学んで対馬以酌菴第一世の中原玄蘇である。この僧が朝鮮文書のことを宗家で掌つていたわけで、今は炭鋺のある福岡県の鯉田の人である。

釜山の戦はあつてなく終つたのであるが、翌日には東萊城を陥れるのである。東萊は釜山鎮に近く温泉の湧出する土地である。その時の東萊の府使は宋象賢という人であるが仲々稀にみる立派な人物であつた。釜山鎮城が日本軍に攻められているということを聞き、急を告げて邑内外の民兵を集めて城を守つていた。低い山城であるが、東南に面してなだらかな傾斜があり、一丈七尺の外壁をもち、城内に徐々に四段層程の低い城壁を囲らした濠のない城である。慶尚左兵使の李珣も急いでこの東萊城に入つてきたのであるが、伝令が、釜山鎮城が陥

落したという知らせを持つてくると、怖じ氣がついてしまった。府使の宋象賢が与に城を守ろうとすずめるのに

「私がここの大將である、城を出て陣を構えよう。貴殿は此処を守つておれ。」

といつて、正規の兵隊を僅か二十名ばかり残して逃げ出してしまひ大分離れた蘇山というところに陣取るのである。何とも情けない大將である。

この東萊府使の李象賢という人物は、宗義智や柳川調信が前に使者としてきたときに応待しているので面識もあり、とりわけ調信とは肝胆相照す仲になつていてお互に深く好意を感じ合つていたのである。

たまたま戦というものが、昨日の異国の唯一の友を今日の敵にしまった。象賢は李珣らの卑怯な言動は見えすいていて憎悪を感じたのであるが、今はいもう敵が攻めてくるのを防がないわけには行かない。

軍民を指揮して防禦大いにつとめたのであつた。柳川調信は、東萊には畏友である宋象賢が守つていゝのを知つていゝので、何とか一命だけは救けたいと思ひ、木板に墨書して

「戦う決意があるならいさぎよく戦え、戦う意志がないなら守を解いて降伏せよ」

と城内から見えるように掲げた。象賢はこれに對して、同じように木板に墨書して城壁から投げ下してきたのを見ると、こう書いてあつ

た。

「死は易く、道を仮すは難し」

あくまで城を枕に討死の覚悟である。これはもう既に自分が己が父より先に死ぬ不孝を報らせるため、扇面に

「孤城月暈、大鎮不救、君臣義重、父子恩軽」

と書き認め、家来の郎党に持たせて城から落しているのをみてわかるのである。

今はもう仕方がない。日本軍は城を三重に囲み、えいえいと押し攻め戦った。象賢も城の南門楼に上り督戦に努めたのであるが、釜山を陥入れた勢をかって日本軍は攻めに攻め、城の背後の山から攻め下し遂に城を陥落させたのである。

象賢はこれまでと思つたのであろう、王に拜謁するとき着る朝服を甲の上から著け、椅子に倚り死を待つばかりと泰然としていた。

高瀬の万九郎は兵糧荷駄の雑兵として混戦の中を駆け巡っていたがひよっと南門の楼上に駆け上ってみると、敵の大將らしい姿のものが椅子に掛けていたので一寸吃驚した。下卒として死ぬ覚悟で戦いついてきたのであるが、このような大將が何か死ぬ覚悟でいる異常な雰囲気氣を漂わせていることに何か反撥を感した。とつさに、生意氣な、生け捕りにしてやると、「やあーっ」と懸声をあげて取り組みにいったが、したたか靴尖で横腹を蹴られてしまった。思わずかっとなり、

「ううっ」と唸って、たじろぎを直すと腰の小刀を抜きぎまに椅子にかけたままの象賢の首をめぐけて突き刺したのである。その時遅く柳川調信が象賢を探し求めて楼に駆け上つて来たのであるが、象賢の魂はもうなくなっていた。調信は、万九郎に云つたのか象賢に云つたのか「馬鹿奴」と言つたきり、象賢の遺骸を抱きかかえて楼から下りて行った。

万九郎は呆然としてしまった。これは一体何ということであつたのか、数瞬前の出来事が白昼夢のように思われ、不意に毗から涙が出てくるのであつた。殺す心思もなく、殺される心思も突はなかつたのであるが、不意の出会いで氣も動顛したのであろう、また、このまま楼を下りて敵に背を見せたと卑怯の譏りは免れないであろう、また或は、自分に害意がないと覺られれば反対に相手から刺されたかも知れないただ味方の一方の侍大將である柳川調信が吐いた「馬鹿奴」という言葉が不可解でもあるし、やり切れなく淋しい。……自分がかつて清正公に手討にされるころ不図一命は助かつている。命の消えの儂さはこの朝鮮上陸以来しみじみとさつたが、結果的には敵の大將を殺したことは譽れとされるべきなのに「馬鹿」といわれる筋は腑におちぬと南門楼上から遙かに日本に連なる海を眺め、城内外の夥しい死屍を眺め、幼時両親に別れ、他人の家に奉公し、今日まで最下級の生活をし、苦勞の多い浮かばれぬ憂さを酒にまぎらして過した幾春秋を振り

かえり、孤独がますます自分の体を締めつけるのであった。

加藤清正の軍は、小西行長の軍より約一週間遅く上陸しているのであるが、既に行長は釜山鎮、東萊の二城を抜いているので、もとも仲の好くなかった清正は行長の驥尾に附して進むことを好まず、東まわりで蔚山、慶州など廻り、慶北の閭慶を経て忠北の忠州にやってきました。行長は今日の京釜線の鉄路沿いの慶尚道の密陽・清道・大邱・仁同を通り、尚州から忠州に入っている。この二軍とも殆んど戦意のない朝鮮の邑々を障害のない野原を渡る風のように、一日五里から七里の速度で進んでいるのであるから、荷駄の万九郎もすべてを忘れて、この朝鮮の京城という都をみたい心でついて来ていた。通る道々では糧食はそこに在るものを徴発し、掠奪をし、逃げかくれ損なつた婦女を慰みものとするなど至つて楽な行軍であつた。万九郎は朋輩の無頼な行動が何故か嫌で、濁酒には目がなく見逃さず飲み、酔つたりはしたが、他のことは知らぬ顔をしていた。東萊城攻めで敵の大將を殺したことを契機として、万九郎の心は急に何かが成長してきている様子であつた。

あの夕、柳川調信は慟哭しながら城外に象賢を棺に納め埋葬したと、それを遠くから眺めたこと、取り返しつかぬ事を知らずにしてしまったこと、それが定運であつたとしても、何故そんなことに自分が捲きこまれたのか、いろいろと思ひ廻らせば不思議でわからなくな

るのである。

忠州の清正、行長の会合では、この二將の確執があやや決闘にまで持たれそうになつた。これは、清正が忠州に着く前、土民を生捕り、これから先の忠州まで日本軍が通過したかどうかを訊問したところ、誰も通らなかつたという返答であつた。そこで忠州に入ったところ、既に行長の軍の兵士たちが居り、しかも乱暴を極め、布木綿の類を掠奪し牛馬に満載しゆるゆると行軍している。清正はこれを見て激怒したのである。土民に嘘をつかれたことも誘因があつたかも知れぬ。忠州で行長に

「斯様なものを途中で沢山手に入れて運んでおられるが、都に着けば山程あるのに行軍の邪魔になつてやりきれぬ」

と云うと、行長はこのことは清正の云う通りに、自軍の乱暴した兵士を放逐している。万九郎は荷駄の兵であるので、自分もやつたわけではないが、はからずも小西軍から離されてしまつた。たまたまの清正の軍に先鋒の將で加藤清兵衛という士が居り、この人の下士に万九郎と同郷のものが居ることが判り、その紹介で清兵衛に仕えることになつた。異郷に来て始めて所期の目的の清正の軍に備わることになつたのである。清正の素朴な正直さと規律のある厳格さの方が今の万九郎には好ましく、柳川調信に「馬鹿奴」といわれた悔恨をこの辺りで落したい気持もあつたことであらう。

土民の嘘を吐くことは屢々であるが、小西軍が尚州の手前の善山と

いう所に入った頃、京城から急遽迎撃に派遣された李鎰という巡察使が尚州に入った。その日暮、李鎰の陣に開寧の土民が来て、日軍が善山に入った、よろしく守備を厳にせよ、と通報したところ、李鎰は虚言であるう、お前は人心を惑乱させようと考えてこんなことを云うのであろう、と斬首しようとした。驚いたのはその通報者である。褒美どころか殺されては堪らない、嘘か誠か明朝まで待ってくれ、必ず日兵が

来るから、来なかつたら殺しても構わない、という。この夜、小西軍の先鋒は事実二里程手前の長川という所まで来ていたのである。そこで李鎰は斥候を出すのであるが、斥候も日本兵士が来ていることを確認したのに、眞実のことを報告すると、先程の通報者のように、嘘であらう、首を斬るなどと云われては、これは嘘を云った方が身の為だと、誠にやかに「倭軍一兵も見ず」と報告するのである。そこでこの哀れな土民は無実の咎で翌朝殺されてしまったので、こんなことから正直にものを書いて馬鹿をみると、嘘もいうことになるのである。

行長と清正の京城攻略先陣争いは孰れも譲らないところから起っているが、惹いてはかつての天草一揆平定の際、行長が秀吉から賜った肥後宇土領内の志岐兵部入道が叛逆した時、行長は平定に手古擦り、熊本に在った清正が救援に赴き、自ら志岐の参謀である木山彈正を一鎗の下に討ち取って乱を鎮めたことから因っている。忠州で清正は

行長に

「汝、天草一揆をすら平定し得ずして猪口才なり」

とののしつたので行長は思わず嚇となり、佩刀に手をかけてあわやという時、同席していた佐賀の鶴島直茂が調停して、二路に別れて京城に進むことをすすめ、行長、清正の先陣競べとなったというのである。

清正記では、矢鱈に行長の奸謀を悪口している。例えば行長は部下の或る者に命じて先発させ、清正の進路にあたる川の舟を悉く毀させて行路の遅延をはかったとか、いろいろ記している。しかし自家の文書は書く側の者の依古負するところは免れ得ないので遽に断じ得ないが、小西行長に属するよりは、一命を助けてくれたことのある清正の手下に属していることが万九郎にとっては嬉しく、加藤清兵衛の部下として忠勤を上げむは即ち清正にも忠勤を上げむことになる決心を決めるのであった。

五月二日には清正の軍は王城の地である京城に入っている。清正は京畿道の龍仁を通り、京城の龍山の傍を流れている漢江を渡河したわけである。小西行長は驪州を通り、矢張り漢江の上流を渡り、東大門から入城し、清正は反対側の南大門から入ったという。

日軍来るというので、京城はてんやわんやの騒ぎであった。戦を怖れるより戦意の皆無な民衆は家財を背負って逃げ出すもの、そのすき

まに搔つ払いや盜賊を働くものもあり、多くのものが哀号と泣き叫びながら続々と諸門から安全な地を目指して出て行くのであった。日本軍の無人の野を行くような進撃の前には、余りの油断とはいえ、何の備えもその計画もなかった。李鎰が土民の折角の注進も嘘だときめつけ、尚州で行長に打ち敗られて朝廷に日軍迫ると正式な報告が届いてからは、忍ち宮中も町中に劣らない混乱さであった。如何にしたらよいか、逃げ出すべきか、或は留って防戦すべきか、甲論乙駁してまるで小田原評定である。

如何にして防ぐべきかでは笑い話のようであるが、匣鉄の甲冑を作り兵士に着用させれば、日本兵の鋭い刀槍も恐れるには及ばないと見本を作らせてみたら、重たくて進退が出来ず廢案となったりしている。最後にいよいよ蒙塵ときまり函宝を始めとして図書・簿籍等すべてを放置して周章狼狽、王以下重臣は平安道指して出立している。宮殿は空となり守る人もいない。市中の乱民が侵入して掠奪狼藉したことは日本軍の入城前に火災が起っているので判かる。王たちが敦義門から出て暫く行き沙岨に来た頃、王城を振りかえつてみたら火焰が空に立ち昇っている、一行のものが皆号哭したと朝鮮の記録にある。

公私の奴婢が自分等の文籍が保管されている刑曹に放火したのが手始めで景福宮など次々に焼いたという。朝鮮の奴婢は最下級のものとして、完全な一個の人格も有しない牛馬と等しいものとして蔑まれ使

役された。公賤は戰乱の際俘虜となったもの、婦女を姦したものの、盜を働いたもの、死刑になった者の遺族や逆賊の妻子などで、各官庁に配って使役した奴婢をいい、まあ私賤に較べると良い方であった。私賤というのは私家に使役される奴婢のことで、生活苦のため自らを売ったり、その子を売ったりしてなったもので、子々孫々までこの階級から抜けすことが出来なかった。これらの奴婢を管掌していたのが時代によつては違ひが掌隸院とか刑曹とか云われた役所で、奴婢を保護するどころか反つて使用者側の利益をはかる機關となつていて、この競争のどきどきに自分たちの名を永久に誣滅しようとしたのである。

万九郎たちの属する加藤清正の陣所は南大門内の小公主洞であった第三軍である黒田侯も程経て入城、総大将の浮田秀家も入城して暫くの間は京城に駐留して、忽には李王の一行を追跡しない様子であった。毎日毎日これら諸將は集り軍略謀議にあわただしかったが、下級の士卒たちは至つてのんびり過していた、しかし規律は乱すようなことは許されなかった。

京城は日本の町とは違つて偉大な城壁を周囲の山から山へと選り選ばれた大きな街であり、城門の偉容、城内にまた其処だけ嚴重に石壁を選らした宮殿の広々とした一廓など、万九郎たちにとっては珍らしく、また感歎させられるのであった。緒土の小丘には形の佳い松が育ち生

え、薬水と呼ばれる泉からはこんこんと何ともいわれぬ良い味の水が  
尽きることなく湧き出ていた。あちこちの叢をなした黄色い連翹は陽  
光に冴え輝き、酒店から購ってきた白く濁った酒を飲んで、孤り丘に  
ひっきりかえつてうつらうつらしている、日本と違つて空気も澄み  
渡りからつとしていて、何もかも忘れてしまふ程であつた。万九郎の  
寝ころんでいる丘からは南山から累々と連なつた城壁が稜線の樹々の  
間に見え隠れしている。目の下に群衆が集まつているのは南大門の入  
口である。此処に高札が樹てである。清正の布告がこんな意味だと人  
から聞き知つたのだが、

示諭境内之黎民、及鰥寡孤独。僕奉殿下之命、撫当境、要除苛政、  
而布善政、救民於塗炭。連還旧居、以各修家業。勿疑勿疑。

これは一般の民衆に対してのもので、安心して帰つて家業にはげみ  
なさい、以上申すことを疑うなよと言っているのは、吾が命を助けて  
くれた清正公らしい文句だと、ひとりりで微笑みたくなつてくる。もう  
一枚の高札は役人に向つてのもので

呈示境内之文武官僚、奉吾殿下之命、安撫此境内、僕雖不敏、要布  
善政於境内。各還本宅、以精我芸、則必応其器以授職矣。先服者賞  
之、不服者罰之。請計之。

と書かれてあつた。日本軍の軍紀が案外乱れていないのを見て、毎  
日市民も噂を聞いて段々と帰つて来た。町も入城当時と比べれば賑や  
かになつたものである。お蔭で金さえ出せば好きな濁酒も手に入れて  
飲むことが出来る。城門の出入りも朝鮮人は日本軍の発行した通行証  
で自由であつたし、叛逆を企てない限り、その生業を続けてゆける  
ので、婦女子も数を増してきていた。

懲罰録によると、必ずしも京城に在つた日本軍の軍紀が厳正であつ  
たとは言われていない。戦争の慣いで悪いことをする者も多かつたこ  
とである。誌すところは、壬辰の歳、賊京城に入り、毎日分れ分れ  
に城外に出て掠め、園陵さえも残さなかつた、とある。小人数で群を  
組み、大きな墓あばきまでしたというのである。

万九郎は何時ものように大地に熟睡してしまつたらしい、何時の間  
にか薄暮が迫り地熱が冷えてきたのにも気がつかないでいた。何  
か騒がしい気配がしたので目が醒めたが、味方の兵五・六人が藪や叢  
を探索しているのであつた。そのとき一人の兵が何処からともなく翔  
んできた矢で胸を射られて反る様に倒れた。目を四方に配つて再び万  
九郎は土に伏した、矢の飛来を防ぐため本能で反射的にそうしたので  
ある。暫く静かであつたが、つと人の気配がした、松の幹をよぎり万  
九郎の側の叢の中に身を沈めた韓人の士がいた。万九郎は東萊の南門  
樓を思い出していた、敵と一対一で目のあたり遭遇したのはこれで二



度目である。敵のその男も土に直ぐうつ俯している。万九郎を直ぐ認めて色を変えたが、万九郎が微笑んで、手でじつとしておれという合図を送くると、心が通じたのか動かさず隠れ伏した。味方の者たちは暗くなりかけた四囲と気味の悪い矢と、傷手を負ったものがあるのと探すのをあきらめたいらしい。三々五々自分の陣所に引き揚げてしまった。

万九郎は咄嗟にこんなことをしてしまったのであるが、東萊で敵將宋象賢を刺したのとは正反対の結果にしてしまった、今度は敵の命を救ったのである。助けられたこの男は、後でも述べるが、京畿道高陽の人で進士であり弓術に巧みな李櫓というものであった。日本人はみな敵であると思っていたのに、自分の身は考えず、敵に通じると斬首されると聞いているのに、助けてくれる機を与えてくれた万九郎に、言葉は通じないが、姿や顔に感謝の心が表われるのであった。

南大門外には、清正の高札もあつたが、それにも増して怖れ嫌われたのは処刑場があつたのである。燃藜室記述に

亦た賊に媚び相睨み、嚮導して悪を作すものあり、如くは謀議して賊を殺すものあらば、輒ち其の民の告ぐる所と為り、鐘樓前及び崇(南大門)礼門外に焼殺し其の酷惨を極め以て威を示す。嚮導其下に積む。

とあるが、この通り毎日幾人かの韓人が捕えられ、哀号、哀号と

泣き叫ぶのを殺すのをみていると、適度万九郎が捕えられて手討になりにかかったことを思い出し、清正に対しての助けられた恩と、また憎しみとが心中むらむらと起り、相尅して暫くは絶えない。それでいて何か憎しみの方が段々強くなってくるようであった。

万九郎は翌る日、たまたま使役に出て鐘樓のある京城でも最も人出の多い鐘路の通りを東大門に向つて歩いていると、袖をひくものが多い。乞食か、この頃出没し始めた遊君であろうかと

「五月蠅い、やめんか」

と云つて、そのまま行き過ぎようとしたが、この女は執拗に離さない。ものも言わず眼で此方に来てくれと哀願するような気配である。公婢か、家族に別れ別れになった孤独な良家の子女か何かわからないが、つつましやかな風情である。何か理由あり気で春を賑ぐとも思えず、何か断れない気持もあり、導かれるまま鐘路の裏路次について行った。

日本軍の諸兵に出した御触では、大道大街は通行するには単独でも差支えないが、一度路次裏に入ると羊腸の如く宛も迷路となつており、何処から入り何処へ出るかわからなくなる、危険であるから一歩も踏み入れてはならぬとのことであつたが、今はそんなことは忘れ果てていて、素々として歩くこの韓女についていった。

女はとある酒幕に入つて行くのである。入口から這入ると直ぐ広い

土間で煙が室内にたち籠っている。中には二十八程の荒々しい様子の男どもが、各々大きな碗で濁酒を飲み、喋舌り、或は唄い、或は戸櫛から勝手に肉や肝をとり食刀で俎板で切り、焔炉の網にのせ酒の菜と立っている。煙はこれらの肉や臓物を焼く時に滴り落ちる油が燃えて立ち籠めるのである。室内は煙と暗さで戸外から入ってくる目も昏み無気味な感がしないでもないが、導き入れた女は、正面に坐つて酒を客の注文に応じては側の顔から碗や平皿に注ぎ入れている主人とみえる四十恰好の女に連れて来た旨を告げると、この女主人は奇妙にも「ようこそ来て下はつた」

と日本語で言うのであった。

案内され土間を抜けて奥の温泉の一部屋に行くと、其処には韓人の士が木枕で臥ていたのが、起き上り片膝を立てた控坐をかいた。

「私は高陽の出身、進士の李魯というものです。昨夕は身の危険を、危うく南大門城外の焼け燼となるところを助けて貰つて有難く、尊名も承らぬまま謝恩の意を表すため賁下をここに呼んだわけです。」  
という意味のことを言う。これはこの女主人が通辞をしてくれたのであるが、聞けばこの女主人は好馬から来たのであるが、もともとは京都の生れで家貧しく、幼にして機屋に売られて奉公していたのに、十五歳頃病に罹つたのを、その主人がたつた十兩で好馬から来た人買に売渡されたという。幸い其の後体もよくなり好馬では婢として奉

公していた。ところがその主人が船で往復する釜山に商売の店を持つたので、釜山に渡り日本人の居留区に住み、主人が釜山に居る間は身のまわりのことなどをする妾のようなものになり、この主人が病死してからは、奴婢の出身であるから構つてくれる人もない事を幸いにし、取引をしていた寛裕な韓人の世話で或る人の妾となり、流れてこの京城に来て今はもうすっかり韓人になってしまい、二十年にもなるというのである。

李魯は姿美しく頭脳も良く、適々かつて朋友と酒を酌みにきて、この主と知り合つたのであるが、日軍入城にも逃げ出さず、常時酒が有るので、ここを京城での根據にしているという。昨夕も遅くなつて城内に忍び入り、当分はこの家に匿つてもらうのだというわけなのだ。

万九郎もともと濁酒を飲み話合つたのであるが、この抵抗の士レスケンの話には大変興味を感じたのである。彼は言うのである、今に見てみよ、今上陛下宣祖の取り巻きが愚か者ばかりであつて、再三の通信使に對しては、そのままにしてはつきりした意志表示もなく、日本の秀吉に會つて帰つた使者の報告を玩味して考へるものもなかつた、余りに日本が後進困と覬めきつていた。今はもう戦火が拡がり大明国の大軍の助勢を待つより外はないのであるが、吾々有志は困を憂い尽忠の志篤く、いま各道に散在し、京城から釜山までの間小人數で守備して

いる倭軍の各邑城を襲撃して後方を擾乱するのである。今は春、これからは夏でまだいいが、今の布衣のままでは日本人は朝鮮の嚴冬を知らないまま、平安道或は咸鏡道に進撃して見よ、手足は凍げ凍死する

ものが続出するであろう。結局は、日本軍はこの朝鮮から一兵も残さず死んだり或は命からがら逃げ帰ることになるのは必定であるというのである。この広い韓土に何万の兵を投じようとも、それは死びた点と線とであり、打ち切るのに大して手がかからぬ。願わくば命の愚人よ、今直ぐ逃亡して此処に匿れてくれ、あなたに対しては自分の軍に反逆させるような行動はしてくれと強要はしない、幸いこの主人はもと日本人である、あなたを伴い連れて来た娘は女主人と韓人との間の子であるが、姿よく見目麗しい、娶るか嫁になるかそれは自由であるが、このまま朝鮮に在留したらどうか。將來のことは神りを祈らう。この私が榮進したら責任持って一生安楽に過ぎせると、真心と熱意をもつてすすめるのであった。

方九郎はそのまま京城に留った。五月二十日を過ぎて清正の軍も行長の軍とともに城門を出て北に向った。清正は六月一日黃海道の谷山から右へ山を越え咸鏡道に入り、行長は真直ぐ平壤に向った。これらの日本軍の行動は鐵路裏の酒幕にいる方九郎には、この酒幕に出入りする幸櫓から直ぐわかるのであった。韓人にして日本軍に情報を提供するもの、韓軍に日本軍の行動を諜知するもの、一人で両方の情報

を交々適当に売るものがあるので、出歩くことがなくてもひとりだけで判るのであった。

酒幕に始め案内してくれたこの家の娘銀順とも何時しか割のない仲になって、言葉も少しは覚え片言であるが用事は足せるようになっていた。韓人の服装をすれば、京城に駐留している五奉行の輩下の武士たちに街で出遭つても日本人だとは見做られず、ただらうかり話しかけようとする衝動をこらえさせなければよかつた。

李梅ら愛國の士の情報によると、清正は六月十七日に元山の南方安辺城を破り、その後漢岸線ハンアンセンを九良哈クニカに向つて海汀倉、咸興、吉州、鏡城を経て長驅豆滿江の近くの會亭で七月二十三日に瀋海、順和二君の王子を生捕りにしたといふ。行長は七月十六日平壤を陥れたが、國王は鴨綠江畔の義州に徙居され無事であり、義州に着いた日は奇しくも二王子が捕われたその日のことであつたが、このことは宣慰にはまだわかつていなかった。

概ね山に隔まれた京城の夏は暑く、光線が届かない温泉の冷えた油紙に背を押してねていると、戦のことも故郷のことも暫らくは忘れて銀順の愛撫に夢中になつたりしていた。手討にならうとしてた時既に方九郎は四十になつていたが、係類少く一生妻帯も出来そうにもなく自らもその心がなかつたのに、女のを愛を得た今日は、何処に果ててもよし、山当切の言葉の通り、こゝのまま此処に果ててしまふのかと、自

分で自分のことに驚くのであった。

行長、義智等は平壤で明軍を敵つたが、和平の期しがあるとの噂が流れてきた。南の海面では盛に日軍の水軍と韓軍との水軍と戦つてゐるとのことである。若し水軍が敗れるとすると、わが戦士たちは帰るに帰れぬことになる。そうすると畢竟するに私と同じことになつてしまふ。さすれば俺の方が先見の明があつたといえようと、方九郎はのんびり濁酒に溺れるのであった。

夏もいつしか過ぎ、水標橋畔の柳の葉も散り、北岳の岩肌には霜がたばしるようになつた。李膺が始めて会つた日に言つたように韓國の冬は尿尿も凍つてしまふ。肥後熊本ではこんなことはなかつた。北の方に遠征したものはほとんどな様子なのか、寒さが厳しくなるにつれて報道に余り入らなくなつた。混突の薪を南山あたりまで採りに行つたり北門外に時には出てみたりするが、余りの寒さに体の方があきれ果てて腹が痛くなつたりして驚いたりする。混突で何もせずぬくぬくとしているのが韓國では一番安楽であつた。

正月が過ぎて明の大軍が小西行長を打ち破り平壤の城を奪回したと李膺が白誓の顔を寒さで赤くして人つてくるなり言つた。愈々吾等の待つてゐる時が来た、これから大に戦つ、悪人よ、これが最後の別れとなるかも知れないなどと誓ふ。酒を酌みながら、世が太平となり、私もそのうち礼曹にでも動議し、やがては信使の一人として日本

へも行く女と、などと調う女主人と銀順を顧みて居託なく美しい笑顔でいつたりする。方九郎は何とも言えないが、東萊の府使宋象賢の従容とした最後を思い出して、この異國の若者がまたあの人のように死ぬてはなにかと懼れる。南大門外の丘の夕暮、声を発せず味方に知らせずにはからずもこの若い命を助けたのであつたが、いま死を覚悟して強爾としてゐる姿を眺めるとあの東萊のことをこの人の前で告白したくなるのは一体どうしたわけであるうか。夜も更け、銀順もこの家の主人も自分の仕事に忙しくて居ない隙に、逡巡はしたが、東萊と宋象賢という大将をあやまつてこの手で殺したということを啖舌つてしまつた。これを聞いた驩聞、李膺は釜を落すほど吃驚したのであるが、是れお私を吃驚させたことは、この家の主人はもと象賢の妾であつたので、実に銀順はその象賢の忘れ形見であるといふのである。戦のことであるから既往のことは責めることはできぬ、賣下が為なれば他の者がそれをしたことであるうか。象賢先生は覚悟を決めておられたので、死して悔はなかるうか、その血の通つた子を殺した男の妻としたことはどんなものであるうか。直に自分もこのことの理非は判断できないが、暫くこのことは銀順にも女主人にも言わぬがよからう、と言ふのであつた。

これを知つた方九郎は徳前に、折角の落つたうとした生首を打ち砕いてしまふのであつた。

黒田長政は李廷諭の守る黄海道の延安城を攻めめぐみ、慶南の晋州では細川ら七将二万の兵が城将金時敏の好守でこれも敗戦となり、秀吉の叱責で一将の長谷川秀一は快々として煩悶し、遂に陣中で憤死している。慶北の慶州城では清正の一将坂川采女が守っていたが、朴晋に攻められて敗れ蔚山の近くの西生浦に退却している。日軍敗れるとの報が多くなると、各地の義軍がまとまり、勢を得て、日本軍の延びきつた点と縁を襲う機運が多くなってきた。

李檣は何処かに去っていったが、いずれ近くの韓軍に加わったことであろう。鐘路を行進する在城の日本軍も入城当時の盛んな勢はなく疲れ果ててしまったように万九郎の目には映った、情報によれば、清正は遠く元長哈にまで入り、二王子やその妃を擒にしているが、その人たちに對する待遇は丁重だとのことである。万九郎が一時戻した加藤清兵衛の軍は清正の居る安辺から離れた北の吉州城を守っていたが、糧食もなくなり攻圍されて氷寒の世界で殆んど全滅に近かったという。三月一日、滷突で何時ものようにぬくぬくと寝ていると、銀眼が駆けこんできて

「今、鬼上官が興仁門から帰ってくるという噂よ」

と注進してくれる。李檣に告白してから後顔色も悪く、昔より物思いに沈むことが多くなった万九郎を銀眼は懐郷病と思つたのである。可哀そうな銀眼よ。郷里の人に会えば、昔のよくな元気を取り戻し

てくれるかと思つて知らせてくれたのに違いない。万九郎は立ち上って東大門へ向つて酒幕を出ていった。

馬に乗つた清正の姿は、一昨年の熊本城中の手討になろうとした時から始めて見るのである。三十を越したばかりで、戦争の疲れはみえているが依然大将の風格はおとろえていない。雪の凍つた道に雪消の雨が降り出したので、部下の将兵の惨めな姿はどうであろうか。手足を襤褸ぎれで包むものが多く、顔色も土色でないものはない、鍋島の将兵の後に陸続と列んでくるのであるが、門の手前で力尽きたのかばつたり倒れて動かなくなる者もある。自分を加藤清兵衛の荷駄人夫に世話してくれた同郷のものも死んだのか見当らないのである。万九郎はまたもとの道を鐘路を指して帰るのであったが、安易に過した自分が何かうとましく、ひとりてに頬に涙が伝わり水雨が涙を口に運ぶのであった。

加藤清正の京城帰還は行路を往きとは違つ江原道の金剛山を通つているのである。今度の第二回世界大戦の敗戦では咸鏡南北道からの引揚者は、陸路清正の進軍路を逆に、山を越え平安南道に出て黄海道を通り京城に入り、或は金剛山をまわり海沿いに江原道に入り、海路をとるものは船を仕立てて江原道の江陵や長筋に出ているのであるが、清正は釜短距離の峻険金剛山を踰える道をとりに迷に京城に入ろうとしたのである。どの方法でも苦難の行路であるが、清正らは咸鏡道に

伸びている自軍の戦線を收拾して、二月十一日に咸興府を出発し、三月一日に京城に帰つてきている。咸鏡道に一緒に入った鍋島家の記録には

(二月)

明ル十二日七箇城ノ輩ヲ不残引上ラレ早朝ニ咸興府ヲ御立アリ、先ツ安辺迄御出被成、清正直茂ト被打連江原道ニ被懸王城へ被赴ケリ其途残雪猶深ク膝ニ齊シクテ人モ不得歩、馬モ不得進、然共踴躍トシテ漸ク歩行シ、通川ヲ過テ一ツノ大山ヲ越ラルル此山ハ金剛山トテ江原道第一ノ高山也、谷峰一般ニ雪積リ其浅深モ不知、或ハ高嶺ニ僂臥或ハ岸溪ニ落入テ凍死スル者数ヲ不知、日数十八日ヲ過テ行程百里ノ艱難ヲ凌キ同月晦日稍ク王城ニ被着ス。折節其日雪消ノ大雨降り、偏ニ盆ヲ傾ルガ如ク、寒キ事肌ヲ透シ、手龜リ足撓ミ、将卒共ニ大ニ勞シ、兩具ヲセントスレ共糞モナク笠ノ紙ヲ、適油紙ヲ求得テ顔ニ覆ヒ稀ニ片席ヲ尋出シテ後ヲ隠シ卒々王城ニ着陣アル、ステ王城ノ体ヲ見ルニ陣屋モアラス、人家モナシ、依テ加藤相良ノ兩軍当家人数合セテ数万ノ者共南大門ノ外ニ皆徘徊シ暮ニ及テ漸ク笠鞋ヲ抜ケリ、猶ホ更ニ男女牛馬、同処ニ死骸ヲ曝スト雖モ、之ヲ収ムルニ人無シ、而モ臭気天ヲ掩イ地ニ塞カル。

と書かれていますので、万九郎が現実に見た姿そのままであった。清

(青葉町)

(岡崎町附近)

正は南大門城外の青坡の真向いの葛月里の一本の銀杏の樹のある家に落ちついたのであった。万九郎は酒幕にやつて来る者たちの話を聞いて

ては、ひそかに城壁を抜けては南大門の加藤軍の陣地を彷徨し、誰か知り人はいないかと探るのであったが、死んでしまったのか誰も見当らず、今更ながらいよいよ日本との縁が絶ち切られ孤独の淋しさが身に泌みるのであった。銀順の出生を知つてからは、その躰に接するのも何か家賢の顔姿を思い出し、心がおびえ、積極的に愛の行為に出ることが憚られてきていた。幼時から他人に酷使され、その顔色のみを覗つて過してきた性根が、小心さをやけの酒飲みとしていたのが、またこのことを機会に頭を上げて来たのである。

行長は既に一月平壤に戦敗れて京城に帰つていたのであるが、明の大將李如松は追撃して京城を奪回しようとし、二十七日には先鋒が碧蹄館まで来ている。此処は京城から僅かに五里許り北である。如松は立花、小早川らの軍に蹴散らされて開城に退いたが、万九郎を恣とした李櫓は近くの高陽の出身であるので、これより先全羅道巡辺使権標の率いる杏州にある幸州山城に入っていた。李如松の南下する軍と呼応して日本軍を牽制しようとして試みたのである。漢江の江畔に城はあり、背水の陣構えである。徳瑟録には

(明兵)

(漢江)

天兵將に京城に入らんとするを聞くに及び江を渡りて幸州山城に陣す、是に至りて賊京城より、大に出でて之を攻む。軍中洶懼散ぜんと欲するも、而も江水後に在り。走路無く、已むを得ず還て城に入り、力戦す。

とある。

李櫓は弓をとって矢を放つた。他の力ある者は石りを投げ下したりして日本軍をなやまし、遂に十二時間の激しい攻守の撃闘で日本軍を敗走させたのである。城は樹木なく禿山で、城兵は逃げるころもなく戦わなければ即ち自分が死ぬのみであるから、地の利と戦意とで戦い勝つたわけで、李櫓ら同志の奮闘もめざましいものがあった。城は攻めても抜けず、日本軍は退いて各隊が集結し、如何にするかを軍議しているところを権標一万の兵を率いて城中から急襲し、日本軍を蹴散らしたので徹底的な潰滅を受けてしまった。この折、李櫓は惜しくも日本軍の銃丸に中つて倒れたのであるが、盟友のものに、今日死すとも悔はないが、京城鐘路の酒幕に在る日本人万九郎はわが命をかつて救いたるものである。また、かつて万九郎は東萊府使宋象賢を殺したものである、今はのきわに一言伝えてほしい、それは、運命はそのような巡り合わせである。いろいろ考えてみたが、人間天命に逆らうべきではない。人はその天の命ずるまま行動すればよい、苦に病むことはない。と伝えてくれ、と言ひ遣して絶命した。

小西行長、加藤清正は幸州山城の攻撃が失敗に終り、負けそうだと  
の伝令を聞き、急いで救援に行つたが、城には一兵もなく撤退した後  
で完全に焼き払つてあり、附近の山林には、日軍の戦死したものを八  
裂にして樹々に懸け連ねてあるのがあつた。

李櫓が戦死した報らせは万九郎の許に寄せられた。遺言も一緒に伝

えられた。天命の赴くままに自らを処することは易しい。自分一箇の  
流浪は銀順の愛を得ない前であつたら、意識せずして行動はなされた  
であろう。知らぬとは云え父親を手にかけて殺した者と夫婦であること  
は、仇として罵られ殺されても致し方がないのである。万九郎が困っ  
ているのは、このことがどうしていいかわかぬからである。

氷もすっかり融け、春の光が射すようになった。昨年五月始め京城  
にきてからもう一年に近くなつてゐる。毎日毎日単調な生活を送る万  
九郎には、すっかり韓人になりきつて日本の女と思えない程の銀順の  
母を不可解にも思つた。奴隸として海中の対馬に売られ、異国の土地  
に住み、異國の人に妾として仕え、異國の人の子を孕み、主とする人  
に棄てられても、酒を売る店を始め経営も上手く、子は立派に育て、  
一言も自分の生れた故里のことや愚痴をこぼさず、異國で順応して遅  
しく生きてゐる。銀順は母の故里は知らず、恐らくは父の顔も知らな  
いのであろう。碗を洗つたり、炊事をしたり、洗濯は春になつて忙し  
く、一冬中着たものを大釜で丸ごと煮て、それを河で洗つてくるのに  
忙しい。こんな姿を眺めていると、引き会わしてくれた李櫓の有りし日  
の姿が懐しく、まるで自分の弟か子供のようにいとしくなつてくる。  
高陽は西大門外三里のところにある町だとのことだが、何時かはその  
丸土壇に身を投げかけて泣いてみたい。俺はどうすればいいのか聞いて  
みたい、幽鬼になつて出てきてくれてもいい、と万九郎はそんなこ

とを考えたりのであつた。

四月になつて在城の將兵たちにも日本への帰還の噂が立ち始めた。万九郎は鐘路を韓人の姿になりきつて歩き、擦れちがう日本兵たちの話を耳にかすめて知つた。南大門外の清正の陣地の近くではこんな話も聞いた。

倡義使金千鑑という人の家来の李蓋忠という將が清正のところに入り込み二王子に面接して歸つた、と。清正も心よく面会させ、通事を介して問答もしたということである。鬼上官といわれて恐怖された清正は、心のやさしい武人ではなからうか。私のいうところを聞いて、あんなに無礼だ、手討に致すと激怒していたのに、そのままふいとやめて奥に入つてしまわれた。私は清正公に連れられて公のため韓土で死ぬ約束で自分で自分に決めていたのに、つい、こんな状態である。日本軍が引き揚げてしまえば、当初の決心は何時実行しなければならぬのだから、と万九郎は思ふのであつた。

學問がなく、定つた心のない万九郎は、主に仕えては忠義をしなくてはならぬという子供の時から的心と、何かそれに反対しなくてはならぬという二律背反をずっと感じてきている。小西から加藤へ、象賢を殺したことから李榕を助け、いまままた異国の王子を叮重に扱つていくということを知ると、惜しみを感じてきていたのに、それが薄れて懐しきを感じたりするのである。銀順の愛に溺れていても、矢張り同

郷の者が恋しくて探してみたりするのである。

四月十八日によいよ日本軍は京城を撤退し始めた。全軍は慶南の蔚山に集結、それぞれ日本を指して歸れるのであるが、そのまま留まつて慶尚南道の沿岸十六ヶ所に集結して陣地を構築することになった。その殿りである鍋島直茂の軍は五月十七日に蔚山に着いている。京城には四月二十日に明軍の李如松や宰相柳成龍等が入つた。約一ヶ年を留守にしたのであるが、王城のある地域はすべて烏有に歸し、市の南方に横たわる南山の麓の日本軍が陣したところが焼け残つていたのである。

日本人が城内にはいなくなつたというが、城外には傷いたものたちが一かたまりに残つていた。南山を越え、その南斜面を下つた利泰院にそれらは永久に住み韓人と化した。万九郎はひとりになつたが、銀順とその母が居り、李榕の教えたまま運命に委せたのである。日本の傷病兵のことは、宣祖大王実録に

龍山の留倭儼然安坐し反つて民の食を費す。之れ枋頭濟飢の拳に異なるなし。速かに処置をなすの意経略前に施行を口請す。上之に従ふ。

これでわかるのは、明軍の終略宋忠昌という人が、朝鮮側と交渉して日本の傷病兵を救済し李泰院に移して住わせたのだ。



万九郎は時には濁酒をひっさげて慰問したりするのである。自分の身分は明さないが、釜山に往來し少しは日語を解するのだとか、住めば韓土も仲々良いところだ、などと言ひ、若し望むのならよい女を妻に世話してやるうかとか話して帰るのであった。

ある日の夕暮、南山を越え暗くなって鐘路のわが酒幕に帰つて来ると、人が黒山のようにたかっている。何事が起つたのかと万九郎は走り帰つてみると、店内はもとより厨房も居室も滅茶滅茶に破壊されている。隣の住人に聞くと、日兵を匿まつた疑で明兵が取調べにきて女主人とその娘を拉置したという。女主人は、探さば探せ、娘と二人しか居ないではないかと反抗したため、鞭うたれ引きたれられていったが、諜報者が確かな筋からだと言ひ張つていたので、恐らくは訓練院の牢で窮死させられるか、死罪になるか、明国まで慰みものに連れて行かれるかだろう、と語り、貴男も早く立ち去るがよい、類縁の者もその罪は免れぬ、早く逃げよとすすめるのであった。

ああ、遂に避けられぬ天命がやつて来たのだ。今は日本人である自分には悲しい妻の銀順を救う道はないのである。たつた一年の契りであつたが、天が自ら手を下して悩みを断ち切つてくれたのだと万九郎には悟れた。韓土に渡つて以来己れの接した人はすべて死んだり別れたりすることになる。身についた運命はどうすることも出来ない。李櫓の最後に言つたことが今始めて釈然として解けたのであった。

万九郎は何時の間にか東平館の辺りを歩いていた、東平館は日本の使節が泊る所で、南山の麓にあり、ここを上つて松林を縫うて南山を越える山道がある。燈火は乏しく、大きな篝火の何箇所か見えるのは明軍の將兵の屯するところであろうか。この星空の下、銀順は牢でどんなに歎いていることであろう。生活に逞しい銀順の母は何とか囚われの身を切り抜けて、銀順もともに命助かるかも知れない。今この城壁を越え山頂を過ぎれば、再び彼女らに出遭うことはない。一日本無頼の徒がかくまでの生活が送れたのは、この二人の女性のお蔭であるが、引き合わせてくれた李櫓のことはどうしても忘れることが出来ない。夜空に突兀として北斗七星の下に三角山が聳えている。京城三里の外の高陽に李櫓の墓を訪れることは出来なかつたが、いま此処で王城の地に別れるに当り深くその冥福を祈ろうと、膝まづき深く首をたれるのであった。

南山の南斜面を降り梨蔭院に来て、今日昼間訪れた傷病兵の一軒の扉を叩いて起した。これは加藤軍の兵士であつたからである。今度は身をかくす必要はないし堂々と困言葉を使える。身の上を語り、一昼間おぬしらによか女子を嫁に世話するなど申したが、あん時は本心じやつた。今はもう仕様がなか、あんた達はここのお人になるんじやが、俺はまた清正様の一手に潜りこもう。」

「それがよかばい、あんたは朝鮮語も出来るし、追つて行かつしや

れ。」

とすずめてくれる。

「可哀そうなのは銀順と申す吾が嫁じやが、あんたが本復次第俺のこ  
とを伝えてくれ。如何に俺が恋しうても、お前を生んだ父親を殺した  
のはこの万九郎じや、といえは、縁なき者とあきらめてもくれよう。

これは言うなと、李櫓という人のきつい言葉じやったが、今は言うた  
方がどちらもありらめがつくというものじや。」

と、これだけをたのんで、万九郎は何処ともなく立ち去って行っ  
た。

万九郎は荷駄で京城に進んだ道を逆に帰って行った。清正は  
京城に駐營したが、万九郎がどうして又清正の陣中に入るようになっ  
たか詳らかではないが、昔の通り酒を食い、用事のない時は睡ってい  
た。天命に逆わぬ運命論者であるが、他人には何も喋舌らず、毒にも  
薬にもならぬ男と思われて、結局その方が万九郎にとつて都合がよ  
かった。

太閤秀吉は前晋州城で敗戦を喫したのが残念でたまらず、その折も  
文書でひどく叱責して一将はそのため憤死しているが、再び日本武士  
の面目が損われたと、わざわざ名護屋の本陣から浅野彈正、黒田如水  
を釜山に派遣して特別命令を諸將に与えた。そこでまた清正と行長は  
先鋒として進撃するのであるが、清正は梁山を経て六月二十日晋州城

外に陣し、全月二十九日に陥落させている。城は南江を背にし幸州山城  
のように城兵は困れば逃げるところがない。晋州は湖南(全羅道)に  
接しているのので、一度破れたら全羅道の湖南地方が席卷されてしま  
うので、この城には市民の士女も合せて諸道の將士とも六、七万人もいた  
という。しかも協力皆城を死守する決心で戦の激しさがうかがえる。

晋州城は外城の周囲二千六百五十歩、高さ二十五尺、女堞一千六百  
四十六、瓮城三、水門一、暗門一、城内に濠池四あったという。女堞  
は物見、瓮城は二の丸のことである。城中の士気は安邦俊という人の  
書いた晋州叙事に

是に於て城を分ちて守る。城南の礮石敢て除絶を為し賊犯す可から  
ず、惟だ東西北の三面、敵を受くれば廣るべきを以て、義兵をして  
之を守らしむ。黄進、李宗仁、張潤各數十人を率い、賊の薄る所に  
随い、往来相救う。幕下の諸生親しく酒食を持し、城を巡りて士を  
餉す。約東既に定まり、城中の人、皆死を以て自ら誓う。

皆決死の覚悟でいたことがわかる。日本軍も亦名譽挽回の勢で攻めた  
が、城壁にとりつくことが出来ない。清正は部下に命じて木車を作り  
それに牛馬の皮革を何重にも覆い張り、その中に人を入れ、それで銃  
丸、石、熱湯など城壁から乱射乱下するものを防ぎ、大きな鉄棒で壁  
を毀して進入路を造ってやっと勝つことが出来たのである。

万九郎はこの数百匹の牛の皮剥ぎには疲れ果ててしまっていた。小用をしたくなつたので陣屋から離れた木立に入ると、年の頃十二、三歳の朝鮮の男の子が疲れきつて上に寝ているのである。可愛げな賢そうな子で、服装は上に汚れているが良い布地らしい。これは城から抜け出して道に迷い、日本軍に捕われるのを恐れて逃げ彷徨つたのであると、そおとと抱き上げたが余程疲労したのであるう、睡りからさめないで、自分の寝床の藁束の中にねかせてやった。

翌る日、万九郎は加藤清兵衛の義弟である寺木左衛門という士にこの子供のことを告げた。左衛門が会つてみると如何にも怜悯なように見受けられる。その姿は子供であるが敵の謀者であるかも知れないと試してみたくなり、白刃を抜いて斬るぞとおどしたが、この子はびくともしない。刀を鞘におそめて、更に「白楽天の詩は如何に」と書いて問うと、たちどころに

日高睡足猶慵起 小閣重衾不怕寒  
 遺愛寺鐘欵枕聽 香炉峰雪撥簾看  
 匡廬便是逃名地 司馬仍爲送老官  
 心泰身寧是歸处 故郷何独在長安

と筆を執つて書いた。寺木左衛門は文武に優れた士であつたので、驚いて清正の陣所に伴つて行つた。清正は会つてみて、資性が英敏であ

ることと、親故の踪跡を失ひ孤児となつたことを憐み、自分の側に置くことにした。万九郎は自分のことのように喜んだが、清正にはあれからずつと面と向つたことがなかつたので、清正は万九郎のことなどすつかり忘れていたのである。寺木左衛門は朝鮮の文化に懐れ、清正の軍を抜け出し朝鮮に留つて一生を終えたという伝説がある。韓国では日本の「青年武士で先鋒隊に加わつていた「沙也可」というものがあり、これは可の字ではなくて門という字を読み違えたのかも知れない、そうすれば左衛門と言が通ずるといのである。慕夏堂といつて有名で、晋州牧使張春点の娘を娶り、大邱府の南の友鹿洞に住み、その家の中華を慕う意味で慕夏堂と名付けたのであろう。今直に寺木左衛門が朝鮮で伝えられている「沙也可」という名の左衛門であるか否かはわからぬが、万九郎の京城での生活を秘かに知つており、自分が朝鮮残留の志があるところから、階級の差は甚しかったが、左衛門と万九郎は何時の間にか二人だけの秘密をお互に打明けたに違いないのである。

晋州城攻めの後、清正は梁山城に帰り、しばらくして日本に引き揚げたが、この寵愛した朝鮮の侍童は、長じて日蓮宗の僧となり、熊本本妙寺の第三の祖となつた日遙上人である。

万九郎の消息はその後、人の目に触れず、そのまま逃亡して寺木左衛門と行を俱にしたのか、それとも熊本に帰つたのか、誰にも暫へわ

から奴のであった。

朝鮮との和議は成立せず、秀吉は明の沈維敬奸臣なり、明將の欺妄許すべからずと、慶長二年正月には再び清正を先鋒として韓国に侵入を命ずるのである。始め竹島の旧塁を復し、釜山に残って成っていた部下たちを傘下におさめ、機張から梁山を攻め日本海海岸に出て、豆毛浦から西生浦に入った。

晋州の城攻めの折、万九郎は韓の秀才少年余大男という子を拾い、加藤清正がこれを寵愛してくれたので、再び失踪したのであった。天の命ずるまま行動するので、万九郎は無償の行為をするのであったが、それはそれだけで別に人に知られて褒賞を望むわけではなく、自らを人に知らしめようとはしないので、人は万九郎に一寸も関心を払わなかつた。あれから二年ほどの歳月を韓土で過しているのであるが、或は寺木左衛門についてまた京城に入ったかも知れない。香として銀順の消息がわからないまま、探し求めて韓人になりすまし、平壤を過ぎ鴨緑江のあたりまでさまよつたかも知れない。だが、今はまた釜山に帰り、再び渡来した清正の軍の中に属しているのを見つけたのは、昔の仲間であるが、戦地呆けをしてしまつて、果してずっと居たのか居なかつたのかわからなくなり、「毛色の違う酒飲みの懶け者が、ああ、いたのだな」ぐらいにしか思われず、放つて置かれたのは万九郎にまつて梓せであつた。

この年の八月、日本軍は全北の南原城を攻めた。明の楊元が馬兵三千を率い、全羅兵馬節度使李福男らが守っていたが、打ち破られ楊元は僅に身を以て脱れ、李福男以下は皆戦死したのである。

万九郎は相かわらず下士として従軍はしていたが、尾末にあつて戦の場で殺戮はしないので暢気であつた。この南原城攻略の直前に清正の先陣は黄石山城を攻め滅したのであるが、守っていた県監郭綏の一家の死に際のこと、また東萊の宋象賢の死を思い出させた。

郭綏は象賢と同じように死を待っていた。胡床に腰を下し神色をかえないで殺された。ただ象賢と違うことは、郭綏の二子腹常、腹厚の兄弟が

「何をするか倭鬼奴、手向かわないものを殺すなんて、人間の心を持たぬ畜生ども」

と、父の遺骸に抱きついて離れないので、この二人も斬殺されるのである。哀れなのは綏の娘で柳文虎という士に嫁していて、二人ともこの城中にいたのであるが、文虎も戦い傷つき日本軍の擒になつて引っぱられて行つたので、遂に残されたこの女は、今は父も死に兄弟も死に、夫も執えられて連れ去られた、今はもう独り生きている甲斐がない、と自分の首を刺して死んでしまつたのである。万九郎は後になつて、この親子四人の死んだ姿をみて、その最後のことを人から聞き、象賢を思い出すとともに、最愛の銀順も明兵に犯されるこ

となく舌でも噛んで自ら死んだのではないか、などと思われ、この越の娘の転っている姿を見て思わず涙がこみ上げてくるのであった。

九月、日本軍は忠南の稷山で大敗し、京城に入ることは出来ず、慶南に撤退してしまふのである。清正は蔚山に行き、加藤清兵衛にここを守らせ、自分は海路を視察する為蔚山から西生浦に出て機張に陣を張り滞在した。

秋が過ぎて薄氷が田浦にはり、鶺鴒が白楊の巢から舞い降りては田浦にきて歩いたりする。三寒四温の気配が著しくなり、綿の入った着物をとり出すと又暖くなって汗ばんだりする。万九郎は蔚山に入つてからは城の普請ばかりやらされて、毎日くたくたに疲れ果てていた。十一月になつて明韓の連合軍はいよいよ南下してきた。

編制として左軍は李如松、中軍として高策、右軍は李芳春、解生が指揮をとり、明の三十三將、韓の七將がそれぞれこの三軍に分れて所屬し、楊龜、麻貴は左右二軍の間を連絡することにした。総大将は邢玠で総兵力十四万と称された。糧食は一個月分、大砲は一千二百四十四、火箭十一万八千、火薬は六万九千七百四十五斤、大小銃子百十九万六千九百六十七斤などである。第二次世界大戦末期の日本の竹槍と連合軍の物量との差を思い出させる。

邢玠は京城発進の前、祭壇を築き天神地祇を祭り、諸將と血を啜り盟約し、秀吉の諸將中最も勇猛なのは加藤清正であるから、これを破

れば他は壊滅するのは易しいと、清正を主な目標として南下攻撃して来るのである。この有様は次の記録に明らかで、如何に出発に当り氣勢を挙げたのが判る、即ち面朝平壤録に

大聚官兵、登壇祭告天地、誓戒官兵。因宴賞諸將、犒賞三軍。祭旗時、万砲齊発、声震天地。朝鮮臣民、举手加額曰、自生長采、所遇兵革、未嘗見此威儀也。

これに反して、蔚山では城普請で一所懸命であった。敵のおさえの当直で浅野幸長が彦陽方面に出張していたが、川向うに出していた二百人の斥候が、明將吳維忠に夜明けに襲撃されて全滅し、幸長も戦い退いて蔚山に入り、急を西生浦の清正に報じている。清正は驚いて直に小人数で蔚山城に入つていく。この蔚山城は海を背にした山城で、朝鮮古来の蔚山邑城でなくて、加藤清兵衛が縄張りした日本風の新城であるといわれている。

此処で有名な清正の蔚山籠城となるのであるが、万九郎は相もかわらず城の中にいて酒を飲み酔っては土に眠るのである。籠城で水がなく、食糧もなく壁土まで剥いで食うことになつても、万九郎は酒が欠乏すれば、夜秘かに何処へともなく姿を昏まし、器甕を携けて帰つて来ては食い酔っているのである。濁酒はマツカリと称し、白米で造る濁り酒であるから腹にふくれ他人より飢えることはない。天命

に従順な万九郎は血色も良く寒餓になやまされることはない。臣民には韓人のように振舞い、酒を何とか手に入れるのであろう。

清正は扈從の士を伴い或る日城中を巡り士気を視察してまわった。ところが、一人城塀の側に酒臭い麝をかいて睡っている男がいる。伴の武士が

「此奴、この籠城で酒を食ってねているとは何事じや、見せしめに斬つてくれる」

と蹴起した。万九郎は高瀬村の村道に睡っていたのかと錯覚を起しそうになった。清正は万九郎の姿を見て、思い出したのか

「お前は万九郎じやな」

と破れるような大きな声を出した。左右の士も吃驚したが、驚いたのは当の万九郎である。「へへっ」と思わず頭を地にすりつけた。思えば清正を間近かに見るのは何年ぶりであろうか。

「万九郎、お前はどのようにして此処に居るんじや」

「熊本で手討になろうとしたその時、お殿様に韓国に攻入るときは連れていってはいよと俺は云うた、その通り紛れて来た」

「そうか、それは大儀じやった、約束を守ってくれたとは感心な奴じや、斬ることはない」

という。万九郎はまた、何か言いたくなるのであった、何故清正に向った時はものを言いたくなるのであろうか。睡っていた自主性がむ

くむくと頭を拾げてくるのである。

「殿様は韓人に鬼上官といわれて怖がられちよりなさるが、真実は臆病な人ですわい」

清正は顔色を変え、額に痼癩の筋が立って来た。

「何で卑怯臆病というのか」

万九郎は落ちつき笑って

「今、殿様は大軍に囲まれておらる。援兵は一ちよん来そうにもなか、こげん時に城に籠つちよるばかりで、一向出て戦おうとしなさらん。こげん馬鹿なこつがあるうか。城には糧食はもうちつとしか残つたらんばつてん、一日城に残れば一日分食って減るだけじや。十日経てば十日減る、こげん減ることはわかつちよる。飢えて腹が空けば気力もなくなる、こげんことじや敵の擒になるだけのこと、今のうち、気力の余り衰えん時撃つて出にやあ」

清正は理窟に負けて、また万九郎に言い負かされてしまった、これで二度目である。清正は背を向けて黙って立ち去った。

翌朝、万九郎の言った通りに清正は門を開いて出撃した。城内の一兵まで出て戦い、大いに戦果をあげ、明韓軍の糧食も掠め取るのであった。万九郎は敵の陣営の様子に詳しく、清正の側から離れず始めて闘いに参加したのである。その有様はこんなに書かれている。

## 府内藩の寺院宝物調査

平明開門出、勢如風雨、健闘走賊、斫其宮、掠其糧、万九郎居清正  
左右、縦横無礙、殫賊無數、既還兵入城、万九郎令諸兵皆白後門入  
身從清正攀皇上樹入壁、

これで見ると何かの間違いであろう、あたかも万九郎が指揮したか  
のようである。清正が例の槍をふるい大声で凭う指揮したのだ。万九  
郎は唯一人清正のお伴をして最後尾から門を入らず、樹に攀じのぼり  
城壁から城門に入ろうとしたところを、明兵の狙撃した弾丸が背中か  
ら胸板を貫通した。両手を広げ、城壁から八間程の下に墜ちていっ  
た。

「銀順よ、これでいいのだ」

と、逆に蔚山の家々を遠く網膜に映しながら咬いていた。

△以上▽

「九州文学」昭和三十五年九月一日発行第六巻、第九号所載のも  
の字句訂正のうえ転載、転載許可済。

府内藩では文化八年六月十三日左の通達を出した。（庄内

町上澗村元庄屋「万御用日記」＝森山家・現在筆者所蔵）

郷中村々本院古来有来り宝物書附差出外様被仰付り尤中  
本寺有之り寺院は中本寺江差出無之分は 御代官を向差出  
外様 且他領江中本寺有之分は 是又御代官（へ脱か）出  
べく様仰付り 其外諸□末寺に至迄持来之宝物取調べ書附  
外様御申付被成り 以上

六月十三日

追而熊群山之義、右同様ニ差出候様被仰付り

註

1. 当時府内藩には郡代はあつたが代官制はない。幕領日田と高  
松（現大分市内）何れかの代官を指すものと思われる。

2. 熊群山は当時彦山末の修験で今は神社として存在している。

（立 川）